

## 私のけい草日記

石川県 大崎 孝雄

はじめに

梅雨明けを告げるように、今年もまた畑の百株ほどの「カサブランカ」が咲き始めました。毎年一番咲きの十数本を、白寿を迎える母がお世話になっ

ていている老人ホームに届けることにしています。明治四十二（一九〇九）年生まれの母は、今ではほど良い惚け症状が、「生き仏」の様相と変わってしまい、昼日中から車いすにもたれかかっていたた寝していますが、程なく訪れるであろうお迎えを、静かに待っているというところです。私はそんな母を見るたびに、次のような「送る言葉」が、おのずと出てくるのです。

「還相のみ霊の夫にあい添うて

永遠に続けよ 銀河旅」

「父星、母星、子孫星

皆々冥土に戻る引揚星（者）」

私たち家族は、今までどれだけ引揚者という言葉に苦しめられ続けてきたことだろうか。引揚者という言葉の裏側に隠されている貧乏人という蔑視と、それを自認する卑屈感にどれだけさいなまれ続けてきたことか。その最大の被害者が、母であつたのです。しかし、六十有余年にわたる歲月という慈雨で、今ではすっかりと洗い流されて、心静かに感謝一筋に生きているように見える母の姿は、立派な「女人導師」でもあるようです。引揚者として味わった様々な労苦の思い出は、人間修業としての貴重な歲月でもあつたことを、じっくりと知らされる今日このごろです。

一 郷愁、羅南の思い出

私は、昭和六（一九三一）年に現在の北朝鮮の咸鏡北道清津府羅南で生まれ、以来昭和二十年八月までの約十四年間を、この地で送りました。十五年戦争期とも言われる「昭和史」初期の悲愴な時代に、どっぷりと浸っての幼少年期だったので

す。しかしそうした時代背景を知る由もなく、私の幼少期は実に恵まれたものでした。

明治四十三年に、日韓併合条約が締結され、行政・軍事の諸制度等の施行と共に、日本人の朝鮮への進出は着々と進展していきました。

そうした情勢のもとに、羅南は北辺の要衝として、軍事面では大正八（一九一九）年に陸軍の第十九師団司令部が置かれ、行政面では大正九年には威鏡北道庁、道立病院、その他の諸官庁の建物も新しく整備され、それに伴って一般住民の住宅も次から次と建て替えられたようです。市街化計画では、羅南公園を中心として、そこから放射状に街路が作られ、羅南川にかかる羅南橋を渡ると日本人（通称内地人）の商店街の生駒町通りがあつて、その中心部分に我が家の「北光館書店」がありました。

加賀前田藩の士族としての大崎家は、明治三十三年生まれの父の兄が日露戦争に参加し、戦傷を負い傷疾軍人として凱旋しましたが、その後軍閥

係の勧めがあつたのでしようか、軍と学校関係の書籍類について、威鏡北道内での一手販売店を許可されて営業をしていましたが、時代を背景にして隆盛を極めていたそうです。

父は兄の要請で羅南に赴き、片腕として働いていたとのことでした。ほどなくして兄夫婦は京城（ソウル）に移って隠居生活を送ることになり、父が北光館書店の経営を引き継いだそうです。

店には常時四、五人の店員さんがいましたが、全員朝鮮の人でした。仕事は学校関係、軍関係に分かれていて、それぞれの注文と配達でしたが、仕事は忙しく毎日追われていたそうです。特に、毎年四月の新学期開始の時期には、中学校関係の教科書などの臨時販売所が設けられて、終日新入生とその父兄で混雑をしていましたし、また毎週日曜日とか祝祭日には陸軍関係の書籍、例えば歩兵操典や作戦要務令などを求める兵隊さんで出入りが多く店内は混雑をして、両親はその応対に大童でした。家の中には炊事のお手伝いのおばさん

や、掃除・洗濯その他の雑用をする朝鮮人の女中さんがいつもいました。

そうした家庭環境の中で私は生まれ育ち、そして幼稚園二年、小学校六年を送ったのでした。いろいろと思い出はたくさんありますが、特に昭和十八年の小学校六年生のときには、朝日新聞社主催の全国健康優良児に選ばれるなど、勉強と運動に精を出していて、陸上競技ではリレー選手として活躍し、そのほかにも相撲、剣道、冬季のスケートなどの選手となっていました。体育と勉強との両立の育成を学校教育の中心としていた時代の要請に適応したのか、小学校卒業時には道知事賞を全校でただ一人受賞しました。そして威鏡北道内の有名校と言われていた羅南中学校にも、トップで入学することができました。入学式には、新入生代表として答辞を読まされました。

自分で言うのもおこがましいことですが、正に黄金の輝きを放った少年時代であり、周囲の人々からも期待を一身に受け、憧憬の的の少年になっ

ていたようで、両親も喜んでいたようでした。

しかし、昭和十九年四月、羅南中学校一年生になってから、周囲の様子がおかしくなってきました。小学校時代の学園の明るさがすっかり消え失せて、戦時色一辺倒になり、重苦しい空気が学校全体を覆いだしてきて、軍事教練の教官と上級生が、やたらと威張り散らすようになりました。具体的には、心理的かつ肉体的な制裁が、日常茶飯事的に行われていて、日一日と暗い学園生活に追い込まれていきました。

そして間もなく、内地への疎開・引揚げの始まりとなってきた、北朝鮮での家族全員がそろっての生活に、終止符が打たされるようになってしまいました。

私にとつての羅南は、輝いた少年時代を送れた、心暖まる郷愁の町となってしまったのです。一方では、羅南での恵まれ過ぎた生活癖は大きな禍根となり、引揚げ後の急変した生活においても忘却することができずに、大変に苦しめられることに

もなつたのです。まさに「禍福は糾へる縄のごとし」をそのまま地でいったのでした。

## 二 慈光に導かれての逃避行

私たち家族にとつての運命の日、昭和二十年八月十三日を迎えました。清津港から上陸して来たソ連軍の急襲で、家族六人は羅南からの逃避行を余儀なくされたのでした。三十八度線を越える逃避行は一週間足らずでしたので、間一髪で抑留の難を免れて、九月末には日本の地を踏むことができたのです。そのことは全く強運と言わざるを得ないことで、まさに強運に恵まれ続けた逃避行でしたが、後日、北朝鮮の各地で避難抑留された人たちの体験記を読むたびに、その悲惨な様子を知り、身の震えが止まらなくなったことでした。改めて当時のことを思い出すたびに、親鸞聖人のお教えにある、慈光（仏の慈悲から放たれる御光のこと）に守られ導かれての結果であったことと教えられ、信仰の有り難さにただただ感泣、合掌するのみでした。その一週間足らずの短い逃避行

ではありますが、日を追ってその行動を記してみたいと思います。

## （一）昭和二十年八月十三日

戦況緊迫によって急遽制定された「義勇兵役法」に基づく少年義勇兵として、学校から羅南の警察本部勤務を命ぜられて、毎日警察本部に通っていて、昨夜も一晩中勤務をして、午前八時に交替して家に帰った。家も店も、昨夜のソ連軍機の空襲によって一時避難をして、父だけが残っていた。間もなく母、弟妹などが無事に戻って来た。再び緊急一時避難を知らされて、その準備を始めました。食糧増産の一助として、丹精を込めていたトマトに水をやり、それから私の部屋を片付けました。

アルバムから思い出のある写真をはがし、額からは賞状を外し、それをリュックサックに詰め込んだが、結果的には家族全員用の食糧や当座の衣類などの荷物が多くなり、私の物を持つだけの余裕がなくなり、再び戻って来るのだからと机の上

に置いたが、リュックサックの二つのポケットが、あたかも膨れ面をしたほったのように見えたのが、今でも忘れられない。

午前十一時ごろ、町内をメガホンで緊急避難を知らせる警防団員の声走り回っていた。そのうちに表通りが騒々しくなってきた、避難する人たちの行列が膨れてきました。私たちも出発することにした。隣家のMさん老夫婦は、歩いての避難行は不可能と判断したのか、「私たちはこのまま残ります」と、悲愴な声で隣近所の人たちに話しているのを耳にしたが、私たちは目を伏せて黙してお別れするしかなかった。みんなは南に向かって歩き始めて、鏡城を過ぎて朱乙へと向かった。数え年の八歳の弟と五歳の妹にとっては歩くことだけでも無理なのに、それぞれ自分の身の回り品を詰めたリュックサックを背負っているの、歩みは遅々として進まなかった。しかし、山道に入ったとき、父の友人にサイドカーで母と弟妹を朱乙まで運んでもらえたので、大助かりでした。

父と私が朱乙に着いたのは、夕刻六時過ぎとなつてしまいました。家族は二組に別れてしまい、心配しながら空き家になっていた温泉旅館に泊まりました。幸いにも、翌朝混雑している朱乙駅前広場で、母たちと合流することができて安心しました。

(二) 昭和二十年八月十四日

早朝、温泉旅館を出て徒歩で朱乙駅に向かった私たちは、しばらく駅前広場で待機していましたが、北行きの列車に乗せられて動き出しました。列車はすべて無蓋車でしたので、トンネルに入ると、下からの蒸気と上からの噴煙のもたらす焦熱によって苦しめられました。

この列車は、茂山まで行く列車のようでしたが、なぜか途中の古茂山駅で降ろされて、鉾山会社の社宅で一夜を明かすことになりました。

(三) 昭和二十年八月十五日から十九日

八月十五日から十九日の五日間は、列車の中で過ごしました。

その日は、早朝からソ連軍の偵察機が絶え間なく飛来していました。ソ連兵のパイロットの顔が、地上から見えるほどの超低空飛行でした。時々避難民に向かって放つ機銃掃射の音に、恐怖を覚えていました。

古茂山駅前の広場は、列車を待つ避難民の群れであふれかえっていました。私たちは、鉦山会社の社員集団の中に紛れ込んで、何とか家族全員列車に乗ることができました。この列車は有蓋貨車でしたが、窓はなく、牛馬の悪臭が貨車内部にこびりついていて、その臭いと天井からの照り返しの暑さのために、生きた心地のしない有様でした。それでも列車は一応、南に向かって走っていました。

詰め込まれた貨車内では、みんなはびつたりと肩を寄せ合っかがみ込んでいて、話し声一つししていない沈鬱そのもので、無風、多湿でその蒸し暑さは異常を絶し、だれしもが苦悶の表情を呈していました。

列車は一時間おきぐらいに停車していて、その間を使つての用足しと炊飯で、列車の周囲は地獄絵図さながらの様相となっていました。羞恥心を失った人間集団というものは、猿の軍団よりも浅ましいことを知つたのも、この時期のことです。

極限状態に陥つた人間の所業の悲しさは目を覆うばかり。怒号乱れ飛ぶ場面が至る所で起きていて、知性教養を多少でも有していた人の中には、その様子に耐えられず、途中の咸興や元山などで前途に不安を持ちながら降りて行きました。

しかし、これらの人々の多くが、ソ連軍に拘束されて、悲惨な目に遭つたとのことでした。運命のいたずらというには、あまりにも残酷無慈悲なことでした。

そんな避難列車の中においても私たち一家は、私たちを守り導いて下さった光「慈光」のお陰をもつて、何とか事故もなく非難列車での五日間の避難行を過ごしていました。

私たちが家族は、京城の伯父しか頼る人がいなか

ったので、地獄列車の苦痛にも必死になって堪え忍んで、五日目の八月十九日に京城に到着、すぐに伯父の家に落ち着きました。

### 三 京城でのひとときの安穩生活

そのころはまだ京城では大きな変化もなく、落ち着いていました。伯父夫婦も変わりなく元気にしていて、ほっと安どの胸をなでおろしたことでした。

父は、あまりにも早い羅南脱出行について、伯父夫婦から嫌みとも愚痴ともとれる叱責を受けたようでした。しかし私たち家族一同は、体を思う存分に伸ばして寝るといって望んでいた夢が実現し、ひとときの平穩な生活に浸っていました。人間の喜びは平凡な中にあることを、しみじみと知ったものでした。

振り返ってみるに、羅南からの避難行は一週間足らずの短いものではあったが、その間に教えられたことは実に大きいものであった。毎朝、白ご飯と温かい味噌汁が家族団らんの中でいただけ

ることは、今までは無意識のことであったが、実はこれは大変なことなのだということに気付いた。この何気ない行為の裏側には、大きな犠牲と、そして多くの人々の祈りと願いの累積が隠されているということと、そしていかなる境遇になっても平凡に淡々として生きることのできる人こそ至人なのだということ、この二つを教えられた。

九月中旬に京城から釜山に出て、引揚船「興安丸」に乗船して、山口県の仙崎港に入った私は、生まれて始めて日本内地の土を踏んだのでした。

終戦直後の早い時期の引揚げであったためか、仙崎港では地元の漁師の家に分宿し、温かい食事の持てなしを受けたことが、今になっても忘れられないことです。暖かい心の日本人に接して、日本人であったことを心の底から喜んでいたのも束の間、仙崎駅からの長い汽車の旅の果ての福井駅で、京城から大事に抱えて来た我が家の家財道具一式、それは新品の鍋釜類一式でしたが、それを荷物棚に上げておいたのですが、気が付いたとき

には消えていました。京城駅でも、羅南で親しくしていた知人に駅まで荷物を運んであげると言われ、その親切心に甘えて柳行李を持ち去られたことがありました。日本人の生活の困窮状態を知らされ、悲しい出来事でした。生活の厳しさをあまり知らずに育ってきた私たちの上に、世間の冷たい風は容赦なく吹きつけてきたのでした。それと同時に、私たち一家の悲観遍歴の始まりでもあったのです。「常に悲観をいだいて、心ついに醒悟す」とは法華経の教えですが、それは「どんな悲観があるかと、それを外にこぼすな。胸の奥深く抱いていよ。そうすればその悲観がやがておまえの心を覚ましてくれる、そして悟りに至らしめる」との教えであり、それを引揚げ労苦に当てはめれば、「引揚げとその後の悲しい労苦の体験は、悲しいことはみんな書いたり話したりせずに、深く心に秘めていつも噛みしめておこう」と心に誓って今日までできたのですが、平和の礎によってその解禁のお許しが出たように思う、昨今の私です。

#### 四 引揚少年の悲しみと悼みの記録

父母の故郷、金沢の地にやっと落ち着いた昭和二十年十二月。それからの私は、まさに悲しみと悼みの渦に巻き込まれていました。昭和二十三年九月には父が急死して、一家は離散してしまい、それからの極貧生活に身心共に疲労困ぱいとなり、それまでの意気軒昂の軍国少年が一気に消沈してしまい、極端にうつ屈されてしまったのでした。極限状態の生活の中で必死に倒れまいと、何ものかにしがみつこうとしていました。

(一) 昭和二十年十二月十五日

敗戦国日本の悲しい姿である食糧不足と、石炭飢饉による列車運転の間引きなどによって、国有鉄道への影響が大となり、学生定期券による乗車が停止されて、今日から来年一月末まで長期休暇となり、学生にいろいろな面で悪影響を与えました。戦争により衰え果てていた学力を、一日でも一刻でも早く取り戻そうと意気込んでいた私にとっても、大変なショックでした。一刻も早く必要

なる教育を受けたいとするときの長期休暇は歓迎できないことでしたが、致し方なく自学自習でやるしかなかった。

(二) 昭和二十年十二月三十一日

いよいよ歴史的な昭和二十年も最後の日となった。この年は思うに、呪わしき年にして祝福すべき年でもあった。日本民族が、この年を期して初めて民族的反省をなした年であった。この年ぐらい多事にして多難なる年であったことは、他にその例が無いであろう。一億特攻で明けた二十年は、北朝鮮では非常に寒く、またここ北陸では数十年ぶりの積雪であったと聞いた。金沢でも、天候不順と戦争末期の混乱と敗戦による狂乱状態で、県民の生活はいまや破局寸前まで追い詰められていた。食糧危機と悪性インフルは蔓延するばかりだが、我々はこの苦しみに打ちのめされてはならない。昭和二十一年の新春を期して、強く逞しく日本の平和再建をめざして立ち上がらねばならないのだ。しかし、汽車運転不足によって約四十日も

の長期休暇となった。しかるに、その汽車には闇屋で満員である。矛盾した社会は、正しいものに立ち直さねばならない、とつくづく思っていた。除夜の鐘が、新しい夜明けのくることを殷々として響かせていた。

(三) 昭和二十一年一月一日

一陽来復、めでたいと言われてきた新年が訪れた。しかしながら、敗戦という現実の前における正月である。一陽来復どころか、国も民も冷厳にして酷烈なる民族再建の試練のるつぽに投ぜられ、生か死かの瀬戸際に追い詰められた新年であった。この日のみは定期券乗車が認められ、九時までに登校、拝賀式が挙行された。久しぶりに校門をくぐった。

御真影のない拝賀式は、なんとなく物寂しさを感じた。いまだ朝鮮の地で、飢えと寒さに震えながらこの日を迎えている人たちのことを思えば、雑煮の一杯でも食べられて正月の気分を味わえる幸せを、しみじみと感じた。

(四) 昭和二十一年一月三十一日

異例の措置による冬の長期休暇も、今日で終わった。長いと思っていた四十日間の休みは、母に代わっての家事、その他の雑務で瞬く間に過ぎてしまった。思っていた勉強も予定どおり進まず、いつそのこと学校をやめようかとも考えるようになった。貧乏一家の長男という立場では、父母弟妹のためにも働き家計を助けねば、一家は破滅の憂き目に遭うのではなからうか。しかし考えてみれば、十五歳の少年にどれだけの稼ぎができるというのだろうか？ 一家の中心となる働き手になるためにも、社会人の基礎となる学力・知識を付けなければ、一家を養うだけの稼ぎはできないとも考えると、進退窮まってしまった。働किながら学ぶという心構えを基本にして生きていく決心をすべきなのだが、どうしても決心しかねてしまった。急変した生活環境に、精神的に参ってしまったのだらう。今までの北朝鮮での恵まれた過ぎた生活環境が、新しい環境に踏み出すことへ

の恐怖心をあおっているようだった。

なり振り構わずに、したたかに生きる勇氣を持てるようになるまでには、まだどれだけ苦難が待ち受けているのだろうかと考えると、煩悶、葛藤な日々であった。

(五) 昭和二十三年九月二十九日

午後五時。今日は早めに夜学に向かった。二時限が終わったときに、事務局から呼び出しがあつて、すぐに帰宅するように申し渡された。不気味な胸騒ぎを感じた。息を弾ませて、言われたとおりに母の実家に向かった。そこで、思い掛けず父の自殺を聞かされた。「いいかね。気をしっかり持つんだよ！」という伯母の言葉もさほど気にならず、他人事の話が聞かされているような冷静ささえ感じた。そして、心の中では「やはり！ それしか取る道はなかったのかな。是非もない」とわりに落ち着いた気持ちだった。

終いに、父は人生の落伍者となってしまったのかと思うと、父が愛おしく、そして可哀相に思え

てくるのであった。家に帰って父の死顔を見たとき、私は人の死というものは思ったより美しいものだと思つた。全く、眠つたごとく眼をしつかりと閉じて、口も一文字に結んでいる父の顔は、夜の電灯の弱い光に照らされて黄金色になつて、彫りたての仏像のように美しく見えてくるのであつた。「そうだ！ 父は仏となつたのだ！」と心にひらめいた。もう俗人の苦しみから解放させてやりたい。よくぞ今日まで、私をはじめとして幼い子供たちに不甲斐なき親と深く詫びながら、痛々しく孤軍奮闘してきたのだから。だれも悪いのではない。敗戦国日本にあつては、だれかが受けていかなければならぬ十字架なのだ。

父よ！ ひと足先に行つて待つてくれ。一夜を共に明かした父の前で、一人寂しく少々自棄つぱち気分で心につぶいた。

(六) 昭和二十三年九月三十日

葬儀は明日と決まり、昨日に引き続きもう一晚通夜をすることとなつた。父は縊死で命を絶つた

のだが、その死に顔には何か満足感が秘められていたようだった。昨夜は一滴の涙も出なかつたが、張りつめていた緊張感も限界を超えてしまつたのか、今朝にはとうとう堪え切れず便所で大声をあげて泣きじゃくつてしまつた。

引揚げ後の生活の苦闘の中にいた父を、一言も慰めてやれなかつた悔しさが私を責めた。父は、我が子可愛さの一念から、子への物質的愛を捧げ得ぬと知り、魂の世界から仏となつて子らを護つてやるしかないと覚悟したのでらう。仏の大慈悲の前に、我が身を御供して救いを求めたに違いない。それは「捨身飼虎」の心境になつたのだらう。加賀前田藩の士族の端くれの血は、今も流れていたので。「名こそ惜しめ」の武士道表現の父らしい生きざま、また死にざまだったので。明治三十三年生まれの享年四十八歳の短い一生の父であつたが、こうした父を持つたことを誇りにせねばと思つた。最後の二夜を父の横で添い寝して明かした。

(七) 昭和二十三年十月一日

午前九時に父の葬儀始まる。身内親戚だけの簡素な葬儀である。手をしっかりと合わせて数珠をやさしく抱いた美しい仏となった父、苦勞の跡がしのばれるごま塩いっぱいの頭、しっかりと閉じた瞼の内には、澄み切った美しい瞳がある。書き置き一つ無き父の死、しかしごま塩いっぱいの坊主頭、こけ落ちきったほほ、齒無き口、これがすべて何よりの書き置きである。価千金の無言の死である。すすり泣きが続く中、読経が流れ焼香が進められた。近親者のみの、心温まる葬儀であった。棺を私たちで担ぎ、農道数百メートルで待つ霊柩車まで運ぶ。火葬場にて父は美しい白骨となった。錦紗の袋に包まれた、父の遺骨を抱きしめて寺に戻る。

遺骨を抱いて戻る山道に、今を盛りの金木犀がふくいくたる香りを放っていた。父も、その黄色の小花から放つ強い香りが好きだった。息絶えた遺体のそばに、一本の金木犀の小枝が置かれてい

たことに気付いた。あの一本の金木犀に、父はどんな思いを託したのだろうか。父として、子供たちにも果たそうとして果たし得なかった様々な思いを、一枝の金木犀に託したかったに違いない。金木犀の強い香りの中に、かくあれかしという父の激しい祈りと悲願が込められているのだ。私は、生涯この香りを背負って生きていくこととなるだろう。

(八) 昭和二十三年十月四日

長戸堀のK医院の伯父の家で、私たち家族の今後のことについての親族会議が行われた。何分にも十六歳の私を頭に、十五歳、十一歳の二人の弟と、七歳、三歳の二人の妹の計五人の子供である。既に、私は土建業のO伯母の所で住み込みで働いていたし、七歳の妹は養女として他家に行っていたので、実際は三人の弟妹のことであった。会議の結果、十五歳の弟は伯父の家に移り、昼は金沢地方裁判所に勤務しながら夜間の高校へ通うこととなり、十一歳の弟はN叔母の下に移り、そこか

ら小学校に通わせてもらうことになった。三歳の妹は、幼な過ぎて親戚内では預かってもらえず、止むなく小野陽風園内の孤児院に入る手続をとった。母は、泊り込みで警察署の小使いとして働くことに決まった。

母は、父を死に追いやったという父方の親戚の冷たい死線の責めに耐えながら、自らの不甲斐なさを詫び続ける、煉獄の日々を送ることとなった。親戚の人々への深い感謝の念と、母に対する仕打ちへの同情心からもたらす悲憤の念の両方が交差して、複雑な気持ちであった。

(九) 昭和二十五年一月一日

引揚げ後、五度の新春を迎える。いい知れぬ不安におのかされた五カ年であった。よくもここまで生きてこられたものと、我ながら不思議な気持ちになった。人間の生命力の、導く強いことを知った。

午前二時に、白山比咩神社に初詣に行く。かがり火と太鼓の音と祝詞の声が、冷気を通して冷え

込んだ体に伝わってくる。神の存在の有無は別として、何かしら心に深く食い込んでくるものを感じた。

(十) 昭和二十五年四月十五日

今年の一月末ごろからO伯母の世話で話を進めていた弥生町の売り家が、今日用意万端整い、明日引越すこととなり、その準備に午後十一時過ぎまでばたばたとする。四年半の間、お世話になった卯建の陋屋ろうおくとも今日でお別れとなった。

(十一) 昭和二十五年四月十六日

夜露の降りた山道を四時間かけて、数少ない引越家具を下の広い道路まで運ぶ。午前七時に運送屋のトラックを迎えて、引越作業にかかる。弥生町の新しい家に入り、初めて家らしい家に落ち着けたことを心から喜んだ。敷地二十坪少々少々の小さな家ではあるが、住宅地内の静かな環境に感激した。

(十二) 昭和二十五年五月十四日

今日は「母の日」と聞く。母に対する感謝の誠

を新たにし、母の苦勞を讃える日である。私は母の愛を思うにつけて、末の妹の芳子のこと気がなくなってならない。何より母性愛を肌で受けた年齢である。幸せ薄い星の下に生まれた境遇に、何とかしてやらねばの念はひとしおである。一刻も早く我が家に連れて来たいのだが、今しばらく待たざるを得なかった。

「芳子よ！ 寂しい孤児院の境遇の中にあっても、生来の明るい素直な心を失わずに待っていてくれ。思い焦がれている兄がいることを、知っていてほしい。」

(三) 昭和二十五年五月二十九日

今日は夜学が休みなので、小野陽風園の園長さんに、母と共にお礼のご挨拶に伺う。芳子は入園以来数回、風邪をこじらせて肺炎となり重篤状態で、家族への連絡寸前までいったが、不思議にも快方に向かったとのことであった。恐らく、それは父の御霊の加護があったのであろう。それにしても、園内の人々の親切には頭が下がるのみ。多

くの人々のお陰で私たち家族の今日があることに、改めて感謝する。遠くから芳子の姿を見つめる母の心中を察すると、胸が張り裂けそうになった。

(四) 昭和二十五年七月十五日

母と弟の勲、多喜生、それに私の四人そろって墓参りに行く。芳子がいれば、これ以上の幸せはないと思つた。一日も早く、家族全員での墓参りを父は待っているだろう。

薫香ただよう墓所に静かに流れる読経に、降りしきる蝉しぐれの加わつた二部合唱は、私たちを幽寂の境地に浸らせてくれた。墓下に眠る父も、静かに聞き入っていることだろう。

(五) 昭和二十五年七月十六日

金石かないわの工家に養女に行つた妹宣子のりこを尋ねる。近くの金石海水浴場は、ごつた返しごつた返しの人の群れだつた。小学校三年生になつた宣子はすっかり大きく育つていた。しかしよく見ると、宣子の顔には無邪気な子供らしさを無くした、うつろな寂しさがほのかに見え隠れしていた。心の奥深くで、何か

に必死に耐えているのだろう。私の目頭は自然と潤んでくる。暖かい養父母に大事にされていても、埋めることのできない何かがあることは、いかんともしがたいことなのだろう。胸が引き裂かれるような痛みを感じた。

(六) 昭和二十五年七月十七日

夕方、再び母と芳子の所へ行く。芳子の顔を見るや、走り寄ってただ抱きしめて涙する母の姿。見すばらしく哀れな母の姿が、一躍慈母観音と変身していた。しばらく見ぬ間に、すっかりやせ細ってしまったっている。うつろな顔で私の膝の上に乗って来た芳子を、私もしつかりと抱きしめた。無性に涙があふれてならない。「家に帰ろうね！」と尋ねても、家に帰るという意味が分からないらしく、黙って何もしゃべらない。「お腹がすいている？」との問いにはただうなずくだけ。魂を失った幼い妹の無惨な姿を目の当たりにして、私は北朝鮮での逃避行中に見た迷い子、捨て子となつて泣いていた孤児たちの姿が思い出された。悪夢

のよみがえりに恐怖感を覚える。一刻も早く、何としても迎えに来なければならぬ思いで別れた。すると、今まで黙り続けていた芳子が急に泣き騒ぎだした。弱々しい泣声の中に激しく何かを訴えるようなうめき声を背にし、うしろ髪を引かれる断腸の思いでそこを去った。

(七) 昭和二十五年七月二十日

今日、芳子を家に連れて戻った。陽風園での検診では、何の異常も無いとのことと安どする。弥生町の自宅に着くと、勲と多喜生の二人が芳子の来るのを待っていてくれた。これで家族全員揃ったことになった。家族の団らんの尊さが、身にしみて分かった。芳子は陽風園での心理面の後遺症が強く残されているようで、日常の何でもない仕事の中でととさせられる面が多々出てくるのだが、暖かい兄妹愛で治療してやろうと心に誓った。悲しみの心の傷は、そう容易に消えるわけではないのだから。それぞれが一人で抱えてきた悲感を、これからは家族という仲間と共に抱えていけるこ

とを感謝したい。

(六) 昭和二十五年九月二十四日

亡父の三回忌を行う。家の借金が強くのしかかっている現在の生活の中からの、法要の費用は相当に厳しかったが、無事どうにか終わった。父亡きあと、私たち一家は散々に他人様のお世話を頂きながら今日まで来た。泣くにも泣けず死ぬにも死ねぬ状態に追い込まれ続けて、生きていくことの恐怖におびえ続けた日々であった。まだ当分、この心の束縛からは解放されないであろう。若年の身にはあまりにも重い荷であったが、しかし神は力無き者、またその家族一同に煉獄の試練は与えぬという。私たち家族は神のおぼし召しにめでたくも選ばれた家族であることを信じ、これからも謙虚に生きていこうと覚悟を新たにす。願わくば、これからも大悲の照覧の下で安住させて頂けるよう祈念するのみ。

(七) 昭和二十五年十二月三十一日

昭和二十五年も今日一日となった。この一年は、

私の家族一同にとっては意義深く、実り多き年であった。父の死後離散家族となった私たちは、やっと復帰集合ができたのである。肉親の情愛に勝るものなし、を全員深く体験した貴重な年でもあった。それにしても、まれに見る強運の家族といえよう。一日も休むことなく働き続けてくれた私。また家族全員も人並み以上の健康体であることに感謝せざるを得ない。ひとえに仏縁のしらしめるものであり、父の御霊のご加護にあつてのことであらう。悲喜こもごも織り成した昭和二十五年も終わろうとしている。「人生何事かをなせば悔恨あり、何事もなさざればこれまた悔恨」という。どうであれ、これからも一片の誠意を心の灯火として、生きていきたいと思っている。

終わりに

父の死から一家離散となったときの様子を、私は日記に次のように書いています。「親鳥を失って餌を絶たれたひな鳥が、飢えにさいなまれて必死になって哀れなさえずりを続けている姿に似た

状態である」と。あれから六十年の歳月が経ちました。母、九十八歳、私、七十六歳、勲、七十五歳、多喜生、七十歳、宣子、六十六歳、芳子、六十一歳、全員健康で、世間並みの家庭を築いております。そしていつしか孫十五人、曾孫十三人が母を中心とした大きな家族構成となりました。あの狂ったような運命の神に翻弄された中であって、よくもまあここまで一人の故障者も出さずに駆け抜けてこれたものだと、ただただ不思議でなりません。これもひとえに、亡父をはじめ多くの先祖の御霊の守護による、まれにみる恵まれた強い家運のお陰かと、ひたすらに合掌するのみです。そしてさらに親戚の皆さん、その他多くの方々の物心両面によるひと方ならぬご援助あつてのことと、深く感謝するものです。残された私たちの生涯は、その報恩行脚でありたいと念願しております。

うたた寝の母の夢路での最後のつぶやきは、どうやら次のようになりそうです。

「運命に恵まれ、健康に恵まれ

家庭に恵まれ、死に恵まれ  
人生、楽しみものなり」

でも、はっと目を覚まして次のようにうそぶく  
かもしれません。

「呆けもまた、行き抜くためのレジスタンス。  
どうやら『死に恵まれる』のは、まだ少々先のこ  
とになりそうです」と。